第 222 回　劇団前進座公演　　2026 年 4 月

「あかんべえ」
感想文集

NPO法人　ふなばし演劇鑑賞会



宮部さんの原作ということで、興味深く観ました。登場人物が多く、理解するのが大変でした。家に帰ってもう一度噛みしめます。深～い内容でした。ありがとうございました。

（ことの葉　川村　７０代　女）

とっても良い劇でした。声も大きく、内容が分かりやすく、ユーモアもあって感動しました。ありがとうございました。（デイジー　村田幸子　７０代）

めちゃくちゃ面白かったです！最初から最後まで見応えがありました！さすが前進座と思いました。

（ザッハトルテ　６０代　女）

子どもとおばけの不思議なお話でした。（ＹＭＯ　田中弘之　６０代）

久しぶりに劇を鑑賞しました。こんな素晴らしい体験を忘れていました。本当に感動しました。ありがとうございました。応援しています！

（リラ　赤荻智架子　４０代）

みなさま、声も大きくわかりやすく、今まで観た中で一番よかったです。とてもお上手でした。

（センチナリアン　尾垣聡子　６０代）

理解しやすい内容で楽しかったです。迫力がすごかったです。１００周年目指して頑張って下さい。応援しています！

（スマイルハート　千葉千尋　３０代）

宮部みゆきの作品には、理不尽な死に方をした人への鎮魂と、悪事への怒りがうまく表現されています。

前進座の『あかんべえ』は、舞台の上でそれを十分に見せてくれました。楽しくもありました。

この芝居を観て「成仏」という思想のすばらしさに気がつきました。第二次世界大戦で、ナチスによるユダヤ人虐殺がありました。その事実は忘れてはいけませんが、今のイスラエルは、ガザ地区などで数万人のパレスチナ人（多くは子どもなど）を殺し続けています。いつまでも恨み（怨み）を持ち続けていると、自分が殺人鬼にとりつかれて無差別に人を殺すようになってしまいます。そう言えば、ユダヤ教やキリスト教には、成仏という考え方がありません。人を殺傷することの悪に、気づいて欲しいものです。

（ハッピープリンス　春日井治　７０代）

歌舞伎の要素を感じました。音響が凄いと思いました。（いちご　無記名）

迫力があった。声が張りがあってわかりやすく、元気な感じを頂いてよかったです。

（デイジー　佐々木美夏　６０代）

とても見応えのある、そして楽しめるお芝居でした。今回、２回目でしたが楽しめました。

（ハイネ　中川奈津子　６０代）

「歌舞伎座」のものとは、ちょっと違った世話もの、前進座の挑戦度を感じました。役者さんの声、舞台装置の工夫、黒子さんの動き、とても良かった。鑑賞会の上演は新劇がほとんどですが、たまには今回のようなもあって良いと思いました。（宙　田口誠雄　８０代）

迫力があって、テンポも良く、飽きずに見れておもしろかったです。

演技中の言葉づかいが昔っぽく再現されていて、細かいところも意識がされているのかなと思い、すごいと思いました。

はじでもしっかり話していたり、動いたりしていてさすがだなと思いました。これからもがんばってください。応援してます！

（リラ　赤荻　楽　中学2年）

今回の芝居を観て、とても良いと思いました。お化け達の過去がとても良かったです。

（ワディ＆ホライズン　向後拓海　高校3年）

おもしろかったです。が、やっぱり長編の物語のため、ちょっと話が端折っている所とか、残念です。

（無記名　６０代　女）

おみつさんの小唄がとても切なくて良かったです。初めて観たお芝居が２０２２年の『東海道四谷怪談』だったので、いろんな劇団を一巡したんだなあと感慨深いものがありました。また、ふなばしに来てもらえるのを楽しみにしています。

（コリン星　西田さおり　４０代）

話の展開が楽しくて、時間が経つのが短く感じました。

（ＫＩＳＳ３　弘重三枝子　７０代）

マイクがないのに、よくあんなに大きな声が出るなと思いました。心に残ったことは、最初の「あかんべえ」と大名の出る所の光の演出の仕方とか、大名を出すシーンがかっこよかったです。（ユミ丸　宮本　樹　中学2年）

ふなばし演劇鑑賞会の今回の上演は、前進座の『あかんべえ』、宮部みゆきの小説のドラマ化であった。深川・江戸文化も理解する女史の知識の広さと、前進座の、歌舞伎から現代劇までレパートリーに入れる広さがこの劇でうまく合体した。

全員着物姿。舞台中心は江戸深川の料理屋ふね屋である。若い武士の登場、料理屋の女将と女中の登場、彼女等の江戸弁、普通の会話のやりとり。彼らの着物姿、襷掛け、前掛け、日本髪などがわたしには粋と映じた。三味線を持つこれもひどく粋な女が出て来る。

黒髪はおどろおどろしく長く伸びている。これには最初は洒落た髪型か？とわたしは思ったがあとでその訳がわかった。また少女が二人登場する。ふね屋の娘のりんと赤く梅柄の派手な着物姿のお梅。観劇のさなかで理解したが、登場人物のほとんどは幽霊である。幽霊ではないのはおりんただ一人であるらしい。病を得た彼女は劇の冒頭で三途の川の岸まで行くが、そこにいた老人により、幽霊が見える水を飲んだ。この世では医師により病気が治り、この世にとどまる。彼女には幽霊が見えるので、いわばおりんを通して我々観客は舞台上の幽霊たちが見えるとの想定である。不思議？あれ？と思ったことは、日本伝承では歌舞伎も含んで幽霊には足はなく、白い着物を着て額に三角形の幽霊の印を付けるコンベンションである。だが、本劇の幽霊たちは二本足で歩き、色物の着物を着て普通の会話をしている。だから幽霊たちと聞き驚いたゆえんもあった。

宮部みゆきの独創か？彼らはすでに死んだが、なんらかの点でこの世に未練を残し完全に成仏出来ない哀れな幽霊たちなのだ。やがて料理屋ふね屋は墓場と寺院の燃えた跡に建てられたと説明される。その説明は、今は長屋の差配をしているが、かつてはその燃えた寺の住職であった老爺によって語られる。

舞台の背景には燃える寺の焔、地獄絵の効果。住職は言う、生まれた子が彼の子だと言った女を罵倒し、やがて次々と人々を殺しまくって行ったと。また、仏はいるかいないか確かめるために殺しまくった、だが仏は答えてくれなかったと。

だが、劇のクライマックスで、住職だった老爺にかつて井戸に投げ込まれたお梅（幽霊）に罵倒される。お梅の井戸のセット上のセリフと演技はまさに圧巻であった。

考えてみれば、老爺は女人不犯のはずの寺の住職であった。それが女人を犯したわけである。究極的に劇が示すのは、仏は、神は存在するか？という懐疑であり、僧侶を通しての人間の大量殺戮であり、罪と罰の問題である。わたしは一瞬、攻撃と報復を繰り返した近頃の世界状況を思い出した。お梅の最後のあかんべえは、戦争で殺された子供や市民たちの、運良く生きているわたしたちへの挑戦とあざけりとも理解出来るのではないか？だが心優しい若い侍の幽霊も登場する。これは救いだ。劇の暗黒を救う。宮部みゆき原作、脚本は佃典彦、演出は松本祐子。衣装ばかりではなく舞台装置、照明効果も見事であった。前進座の力量が生きた。

（ことの葉　水崎野里子）

お化けさんがこわくて、目をつぶっていました。熱を出して、お化けさんが見えるようになったら、ぼくはおりんちゃんのようにはできないと思った。

（ユミ丸　宮本　蓮　小学３年）

楽しく観ることができました。おりんちゃんが叫ぶと、現代劇に聞こえてしまう事があった。

（パンプキン　狩野美奈　５０代）

あかんべえ、とても面白かったです。一番前の席だから余計に、役者さんの気迫のある演技に圧倒されました。セリフも表情も身体の動きも熱がこもっていて、細かい表情も見えて…

さらに、舞台の展開にビックリ。

魂（霊？）が抜けるカラクリには、自然と声が出てしまいました（笑）住職の身勝手な理屈で大勢の人を殺めたいきさつ。そんな考え方があるのか！と新たな驚きです。

まるで、高市が『日本を守るために９条を変える』に通じてるような…こんな考え方、絶対にダメです！

（亜童夢　伊澤　輝美）



宮部みゆきの原作「あかんべえ」は文庫本で680ページを超す大作で、おもしろくて一気に読めてしまう。この大作を前進座が2時間ちょっとで芝居に見せようという危険な賭けにでたのは、凶と出るか吉と出るか危ない橋をわたったはずだ。

脚本を担当した佃典彦氏が会報に述べているように、おおいに苦労したと吐露している通り、その圧縮作業とかお化けと生身の人との表現を、原作のおもしろさをいかに観客に伝えるかと相当苦労したはずである。

ところで題名の「あかんべえ」とはいったい、なんぞや。そういえば小学生のころに、いちゃもんを付けて逃げる間ぎわに舌を出して、何度もやったりやられたりしたな、と思い出す。子どもの悔し紛れのしぐさだったかもしれない。なにはともあれ、お化けの話など作り話の落語の世界すら滅多に出ない特殊な題材を、リアルに恐ろし気にまた親しみやすく登場させている。人と人とがそれぞれ生きていく感情の奥に隠れていそうな、恋愛話などを織り交ぜながら、一二、三歳の小娘「おりん」ちゃんを主人公に登場させて、そのまことに愛らしく賢そうな姿は舞台に映えて、微笑ましくながめていた。生きている人と死霊の「お化けさん」とがたくさん入り乱れて登場してくるにもかかわらず、お化けの姿が見える人と見えない人があるとの発想がおもしろい。だが、芝居だから観客にはすべて見えて当りまえで、のんきに観ていたけれども得をしたみたいな気になった。

じつはこの芝居を市民会館で観てからはじめて原作の文庫本を読んだのだけれど、確かにおもしろくて平明でわかりやすく、どんどん話の展開に引きずり込まれて、途中で本をおけずに困るほどだった。この先宮部みゆきにとうぶん嵌まりそうな危険な匂い?がしている。(マゴメ　ムラタ)



迫力がすごくて圧倒されました。
(スマイルハート　千葉直哉　30代)

住職が人を殺した動機が、仏に会いたかったと聞いてびっくりしました。大変おもしろかったです。
(釈迦力　酒本久子　70代)

大変意欲的な上演で心に残りました。交流会でも申しましたが)最後に興願寺の住職が登場した際に、どのようなセリフを云うのか興味深く観ていたのですが、何と「亡霊が成仏できるかどうかを見定めるがために切ったのだ」と吐くシーンに驚き入った次第です。

宮部みゆき氏の仏教、宗教観を覗き見る思いがしました。

しかし、或いは宮部氏への私の思い過ごし、誤解かもしれず、近々原作を読んでみたい。

それにしても、役者の皆さんよく声が通り、立ち振る舞いも素晴らしく、特に玄之介役の藤井さん、立ち姿と殺陣、おみつ役の北澤さん、三味の歌、良かったです。次作の『文七元結』verⅡもどうか成功されますよう祈っております。
(富士桜　朝日崇　70代)



おめでとうございます！

「あかんべえ」サイン色紙当選者

1165	宙	田口　誠雄さん
1234	リラ	赤荻　智賀子さん
1426	ユミ丸	宮本　蓮さん

※当選した方は申し出てください。

アンケート枚数　26枚	(回収率2.7%)
当日会員数　1,468名	
例会参加者　1,199名	(参加率81.7%)